

実践は、感謝の気持ちをも原点に

上 廣 哲 治

過日、ある女性会友さんから、次のような話を聞きました。

定年を迎えた彼女の父親は、希望すればさらに五年間の勤務を延長できるのを断って、退職されたそうです。数年前から、「これからは自分の好きなことをしてのんびり暮らすのだ」と、定年後の生活を楽しみにしていたからです。ところが、いざ会社を離れて、自由に気ままな生活が送れるようになる、家の中をうろろして落ち着きません。楽しみにしていた読書にも身が入らず、ぼんやりテレビばかり見て、浮かない顔で毎日を過ごしているというのです。

なぜ、彼女のお父さんは、定年後の悠々自適の生活を浮かない表情で過ごしているのでしょうか。

会社勤めのときには、好き嫌いに関係なく、しなければならぬ仕事がありました。仕事を通して社会に貢献し、社会を支えていたのです。ところが定年後は何をするのも自由で、かえって何をしたいのかわからなくなりました。それまでは会社という居場所がありました。そこに属していることで、社会的なポジションが保障されていたのです。ところが定年後にはそうした居場所はありませぬ。家庭に

戻っても、そこにやるべき仕事、役割がなければ、やはり居心地はよくない。家庭が心安らぐ居場所とはならないでしょう。

夏目漱石は、亡くなる二年前の大正三（一九一四）年、学習院において「私の個人主義」と題し、それまでの人生で思い悩んだことや、どのようにしてそれを解決したかについて語っています。そのなかで、教職を退いた後、作家として活動するまで何もすることのなかった自由なときの精神状態について、「私はこの世に生れた以上何かしなければならぬ、といつて何をして好いか少しも見当が付かない。私は丁度霧の中に閉じ込められた孤独の人間のように立ち竦んでしまったのです」

と述べています。漱石でさえ教職を退いた後は、「何をして好いか少しも見当が付かず、立ち竦んでしまったのです。定年を迎え、自由な生活を満喫しようとして、何をしていいのかわからず浮かない顔で毎日を過ごす。元サラリーマンのお父さんも、きっと同じような心持ちだったでしょう。

漱石は、先の講演を次のように続けます。

「そうして何処からか一筋の日光が射して来ないか知らんという希望よりも、こっちから探照灯を用いてたつた一条で好いから先まで明らかに見たいという気がしました」

ただ立ち竦んだまま、どこからか光が射し込むのを待つのではなく、「こっちから」、つまり主体的に行動してなすべきことを探し出さねばならないと考えたのです。こうして、漱石は作家の道を歩む決意を固めました。定年後に自分の道を歩もうとするとき、それが自由で気ままな生活であったにしても、生きることの充実感、生きる価値を、外から与えられるのを待つのではなく、自ら主体的な行動において見いだすことが肝要なのではないでしょうか。

ただ、その前になさねばならぬことがあります。それは、定年までのサラリーマン生活を支えてくれた家族への感謝、特に妻への感謝を伝えることです。

一昨年公開された山田洋次監督の映画「家族はつらいよ」は、サラリーマンの定年後の姿を描いています。団塊の世代と思われる夫婦と長男家族の三世代が同居する家庭が舞台で、定年後の生き方、夫婦のあり方を考えさせられる内容でした。

橋爪功さん演じるお父さんは、子育てや炊事洗濯などの家事一切を妻に任せ、仕事一途に生きてきたサラリーマンでした。定年を迎えると、今までの苦労に対する自分へのご褒美とばかりに友人とゴルフをし、馴染みの酒場に出かけるなど自由気ままな生活を送っています。酔って帰宅すれば、現役時代同様、衣服は脱ぎっぱなし、家事一切を顧みることもありません。

このお父さんが、妻の誕生日が近いことに気づき、誕生プレゼントに何か欲しいものがあるかと尋ねました。すると、吉行和子さん演じる奥さんは机の引き出しから「離婚届」を取り出して、「これに名前を書いてハンコをつけてほしい」と求めます。初めは冗談だと思っ取り合わなかったのですが、徐々に妻が本気で離婚を望んでいることがわかります。

映画は、この老夫婦の離婚問題を中心に、家族がバラバラになりそうな危機を「家族会議」で食い止めようと大騒ぎする様子をユーモラスに描きます。

しかし、ついに夫は妻の望む離婚を受け容れます。署名捺印した離婚届を手渡すときに言います。「長い間、世話になった。何かしなければと思っていた。かれこれ四五年間、お前と一緒にやってよかった」。そして、「サンキュー」とひと言、感謝の気持ちを伝えました。「もういいの。今の言葉を聞け

たら十分」。かたくなだった妻は、そのひと言を聞くと離婚届を破り捨てたのです。

定年まで働く間、家族を養い、子どもを自立するまで育てたサラリーマンの父親の努力は大変なものだったでしょう。口には出せぬ辛酸に耐えたときもあつたでしょう。でも、家庭を顧みることなく仕事に集中できたのは、家庭を守る妻に、そして家族に支えられていたからこそなのです。定年まで勤め上げるのができたのは多くの人の支えがあつたからです。ですから、定年後に何かすべきことを考えるとき、まずは支えてくれた人々への感謝の気持ちから出発すべきではないでしょうか。

さて件の女性のお父さんのその後です。今では、わが会の「朝起会」に出席して若い人に自分の挫折した体験などを、熱心に話しているそうです。年長者だからといって高みから見下ろすような姿勢で論じたり叱つたりせず、若い人の意見に耳を傾けて、同じ目線に立って、それとなく励ましているというのです。まさに知恵のある高齢者の利他の実践です。お父さんは、「これまで自分が受けてきたさまざまな恩を、(我も人も)の仕合わせ)社会を実現する一助とすべく返しているのだ」と語ったそうです。今や生きることへの情熱もよみがえり、晴れ晴れとした表情で日々を過ごしている。彼は利他の実践で、若者のみならず会場の皆さんから支持を受け、朝起会場に自分の居場所を作ったのです。

そこで今月の実践課題です。会社での地位が高く、実績のあつた人ほど定年後も権威を振りかざし、若い人の話に耳を傾けず、その意見を頭ごなしに否定して意欲を喪失させると聞きます。自分中心に世界が回っていると考え、感謝の気持ち欠けているからでしょう。老若男女を問わず、これからの生き方を考える際は、周りから支えられて生かされてきたという感謝の気持ちを原点にして、自分は何をすべきかを考えていただきたいと思います。